

文字改革者 倪海曙の歩んだ道

大原 信一

倪海曙は、一九一八年五月三日、上海で生まれ、一

九八八年二月七日、病のため世を去っている。終年七

〇歳であつた。生誕八〇周年、逝去一〇周年という、

八に因んだ記念の年を迎えるにあたり、ここに一文を
草して、その人をしのび、その功をたたえたい。

(一) 生い立ちと家族

一九三七年八月一三日、上海で抗戦が始まったとき、倪

海曙は医科大学に入って一年半ほどたったばかりだった。

フランス天主教の経営する学校で小学校後半と中学の課程
を終え、三五年の秋、同じ教会系の震旦大学医科に入学し

たが、戦いが始まるや母校の師弟で編成された臨時傷兵病
院ではたらいだ。一〇月に戦線は西方に移った。学校は開
校の準備を始め、臨時傷兵病院は閉鎖されることになった。
だが彼には復学の意味はなかった。そのころ、上の姉が国
際赤十字救済会の第三難民収容所でボランティアの文化教
員として働いていた。彼女の本務校である小学校も開校さ
れることになり、とても手が回らなくなったので、彼は姉
に代わってこの難民収容所で働くことになった。

父親は左官屋の職人であつた。二年しか学校に行ってい
ないが、頭の回転が早く、手先が器用だった。独学で帳面
つけや英語を学び、やがて職人の頭になり、小型工事を請
け負う建築商になった。土地を買って借家も建てたりして
いた。海曙の言葉によると、父は吝嗇で冷酷、彼は幼いこ
ろから父親が好きになれなかった。

母親は上海郊外区の農村の娘で、三〇歳でこの世を去つ
ている。六人の子供を生み、海曙は一番末っ子で、三人の
兄と二人の姉がいた。長姉の秀明は医療の仕事に携わって

いたが、のち小学校の教師になった。母親が若死にしたので、彼は小さいときから、一二歳年上の、生涯独身だったこの姉に育て、もらった。

母親が世を去ったとき、彼は一歳と七か月であった。のち一九四八年、彼は「母」と題する長篇の詩の中で、十五歳で嫁し、六人の子を残して三〇歳でみまかった薄命の母の、苦難に満ちた生涯をしのんでいる。

(二) 新文学運動とのかかわり、その他

難民収容所で働くことになった彼は、夜は上海新文字研究会²が開いた新文字教師訓練班に参加し、勉強した。収容所で新文字を試験的に教えながら、あちこちの収容所に識字班を八クラスつくるなど、彼は精力的に活動し働いた。医科で勉強を続けるのをやめて、文字改革をやりたいと思うようになったが、父親の強い反対にあった。家では上の姉だけが彼を理解し、支持してくれた。しかし父親の希望にはそえないので、のち彼は二〇歳のとき家を出ている。

巴金の小説をよく読んだというから、おそらくその革命的ロマンチズムに共感していたのであろう。高級中学卒業後はゴースキーの「母親」に心を引かれ、魯迅が逝去した(1936)後は、その作品をよく読んだ。だが彼の言葉によると、「学生救国運動と抗日戦争、この二つが私の思想と生活を変えた主要因である」という。

一九三八年一月、上海新文字研究会が会員大会を開いたとき、租界警察³に包囲され、新文字研究会は抗日の性格をもち、租界の中立性を妨げるものであるとの理由で、租界をはなれ活動することを求められた。新文字研究会は難民収容所の新文字教育を続けるため、租界の華人教育処々長であり、国際救済会難民教育課の主任である陳鶴琴⁴にとりなしを頼んだ。陳鶴琴は新文字とはどんなものか、その研究を始めるとともに、難民収容所を实地調査した。その結果、彼は収容所内の新文字による識字活動の意義をみとめ、そして租界当局と交渉し、彼が保証人となって、三八年三月、上海新文字研究会は合法団体として登録されることに

なり、同時に上海の難民收容所⁽⁶⁾で大規模に新文字による識字教育が実施されることが決定された。

倪海曙は難民收容所の識字教育の現場で大きな貢献をほたしていたが、上記の事件を機に陳鶴琴と親密な関係を保持することになった。そのころ『新文字教師手冊』が上海新文字書店から出版されている。これは、数か月の経験をもとに倪海曙が初めて書いた小冊子である。内容は新文字概論、教授法及び教師に必要な種々の知識であった。

彼はまた、上海文化界救国協会の開いた社会科学講習所に参加し、その学生になった。これは一年制の夜学であった。そのころ上海の多くの大学の校舎は郊外区にあり、授業ができなかった。租界に住む教授が多かったので、文化界救国協会はいこれらの教授を組織し、夜間大学を開いたのであった。世間ではそれを「上海の抗日大学」と呼んだ。倪海曙は、陳望道の「中国文芸思潮」、「中国語文概論」を選び、陳望道の学生になった。以後、海曙は仕事の上で問

題にぶつかると、いつも師の教えを仰いだ。師はつねに指導援助を惜しまなかった。のち、三八年の末、社会科学講習所は閉じられることになった。向学心に燃える海曙は師に相談した。師は復旦大学入学の道を紹介してくれた。かくして彼は言語学、文字学および音韻学を専攻した。大学の毎週の課業はあまり多くなかった。彼は新文字の研究にかなり多くの時間を割くことができた。

一九三九年の秋から四〇年の夏にかけて、華光演劇学校で方言劇を二学期教え、方言劇の活動にも参加した。当時、上海の大多数の人は共通語を解さなかったから、上海語による新劇の上演は、新劇大衆化に効果のある手段の一つであったし、上海語のせりふを新文字で記録することは方言劇のせりふ記録問題を解決する良い方法であった。

一九四一年二月、上海の地下党は文化界の人々を組織して、蘇北⁽⁷⁾の根拠地参観を企画した。彼は新文字の党グループから派遣されて、冬休みを利用してそれに参加した。地

下党の手配で、海安・東台・塩城などを参観し、根拠地内の新文字の同志と会見した。この参観旅行には新四軍宣伝部が接待に当たった。

一九四一年二月八日、太平洋戦争が勃発し、租界は日本軍および偽軍警により占領され、復旦大学は自主的に全学休講になった。彼はあと半年で卒業だったが、やむなく新文字の研究に没頭した。

倪海曙編の『中国拉丁化運動年表』が中国拉丁化書店から出版された。これはラテン化運動の最初の簡史であり、一六〇五年（万曆三三年）にマテオ・リッチ（Matteo Ricci）が中国の文字の発音をしめすため創案した、最初のラテン字母の方案から説きおこして、ラテン化新文字の誕生およびその全国各地における運動を述べたものである。これは倪海曙が中国漢語表音運動史について書いた、最初の著述である。

同年には、さらに「ラテン化に反対する10個の理由」を

発表している。これは世間に流布しているラテン化にたいする反対理由を十か条に帰納し、一条ごとに新文字を支持する学者や著名人の語録を引いて反論したものである。

一九四二年三月〜四月の間、地下党の通知により、「敵」のブラックリストに新文字関係者の四名があがっており、彼はその一人であることを知った。上海をはなれ解放区へむかう必要が生じた。五月、地下党の世話で蘇北解放区第四区へ赴き、活動することになった。だが解放区にいたとたん「敵」の掃討作戦にぶつかり、連絡を断たれ、荷物を失い、そのうえ大腸炎をわずらい、十日間あまり海辺を流浪した。行く先々で漁民に助けられ、ようやく上海へ舞い戻ったが、そのころ「敵」は上海で保甲制度を実施していた。海曙と縁をきった父親はいずこへか転居しており、落ち着き場所がなかった。さいわい、母校・震旦大学の紹介で、安徽省の蕪湖（日本軍の占領下にあった）雨耕山のスペイン天主教の経営する内思中学の高中部主任の職をえた。そこは中国人教師は彼一人で、他はすべてスペイン人

聖職者であった。在職一年、彼は学生たちのため図書館の運営・学生会の刊行物・歴史展覧会や講演会の開催を手伝い、演劇・運動会などを通じて学生たちの抗敵意識を高めた。同時に、新文字の研究と宣伝をも忘れなかった。彼これらの行動は、当地の「敵」の注目を集めてしまい、彼は蕪湖をはなれて上海に戻ってきたが、それまでしばらくの間、孤独な彼は雨耕山から長江を一望して旧詩を書いたりして退屈をまぎらわしていたが、ここではからずも中国の文字改革に関心をもつ、一人のスペイン人神父と知り合い、その人から西洋の宣教師の手になる教会ローマ字（とくに方言ローマ字）の状況をいろいろ教えてもらった。

一九四三年秋から、上海震旦大学の付属中学で語文教師を担当することになった。そのほか、党の周辺の仕事を担当し、つねに黨員や解放区からやってくる同志と連絡をとりあっていた。その中でも地下黨員の湯李宏とは経常的に往来していた。湯は当時の上海地下党と新知識書店の輸

送面の仕事の責任者で、解放区にむけて書籍・用紙・印刷設備・薬品その他の物資を輸送していた。⁽¹⁰⁾

一九四四年一〇月、湯李宏の輸送機関は、裏切り者の自白によって覆滅され、海曙も巻き込まれて日本軍の憲兵隊に逮捕された。だが彼は何も機密を漏らさなかったし、新文字工作者の身分を知られることもなかった。一泊二日、拘禁されたが震旦付属中学のフランス人と彼の三兄のおかげで保釈された。しかしこの事件のため彼は震旦付属中学を辞職した。

抗日戦争の勝利後、『時代日報』（地下党がソ連人の名義で出している中国語新聞）の副刊『語文』と『方言文学』の編集に携わることになった。副刊編集には、編集費は出ない。少額の原稿料が出るだけだった。震旦付属中学を辞職して二年半になるが、失業同然だった。材木を商う秘密黨員が毎月米三斗の研究費を工面してくれたので、なんとか新文字の研究を続けることができた。葉頼士の年譜によ

ると、この期間に以下のものを書いている。

- 一、北方話同音詞彙（未刊）
- 二、北方話分類常用詞彙（未刊）
- 三、『北方音、江南音、広州音対照字彙』（初めは『拉丁化新文字概論』の一章であったが、一九五一年一月に単行本とした。五五年七月増訂第二版を東方書店から出版した。
- 四、『中国語文の新生』 サブタイトル 拉丁化中国字運動二十年論文集。これはラテン化に関する重要論文選集である。全書は九編に分かれ、論文一五〇数編と二つの付録を付す。一九四九年に時代書報出版社（のち時代出版社と改称）から出版した。
- 五、『中国拼音文字運動史簡編』 一九四八年に時代出版社から出版した。本書は三〇〇年来の、漢字改革を主張した人たちの様々な貢献を簡潔に紹介したもので、明末ラテン字母の中国流入、教会ローマ字、

切音字運動、注音字母、国語ローマ字、ラテン化新文字をふくむ。

- 六、『中国拼音文字概論』 一九四八年に時代出版社から出版、翌四九年の再版に当たって「拉丁化新文字概論」と名を改めた。本書は人類文化発展史と各国の文字ラテン化運動の角度から中国ラテン化新文字運動を論述したものである。
- 七、『魯迅の語文改革論』 本書は『魯迅全集』から、中国語文に関する論述を摘要したものであるから、これによって魯迅の語文観を全面的に理解することができる。本書は一九四九年、時代出版社から出版された。

またこの期間に、彼は蘇州語で『詩経』を訳した一〇〇編近くを、新聞紙上に発表した。その多くは内戦反対を内容とするものである。のち六〇首をえらんで「蘇州話詩経」として、郭紹虞の序をつけて『東方雜誌』に掲載されたし、

任溶溶が一九四九年に方言出版社の名義で海曙のために出版した。

一九四七年（日付不詳）に、『文匯報』に「米国のジョン・ドウ・フランシス (John De Francis John De Francis) 君に答え中国文字改革に関する問題を論ず」を發表し、当時の中国ラテン化新文字運動の方針と主張を明らかにした。合計二九の問題について、二日間にもわたり連載した。

一九四七年一月、国民党特務分子の活動はますます猖獗の度を加えた。友人の勧告により上海をはなれ香港へ赴くことにした。当時の香港は新文字運動をすすめるにはたいへん良い条件を備えていた。香港新文字学会ではすでに彼のために住居を手配していた。

出發の直前、『時代日報』の責任者の要請で、彼は正式に『時代日報』副刊の編集責任者になった。のち同紙は閉鎖されたので、彼は改めて時代出版社の主編集人になった。

六月八日、『時代日報』は国民党上海政府から停刊を命じられた。捏造された数か条の罪状の一つとして、たとえば倪海曙の編集する同紙の副刊『新語文』のラテン化（ローマ字）読物は、読者にたいして反内戦・反飢餓運動を呼びかける暗号であるとして、槍玉にあがっている。

(三) 建国後の活動 その一

一九四九年五月、上海解放。

これまで、不遇に耐えて、新文字運動の実践を積み重ね、その理論的研究に没頭してきた倪海曙が、たくわえた経験学識を人民のために發揮すべき時代がいついに到来した。

同年六月、北京の「全国文代大会」（文芸工作者代表大会）に参加、彼は文芸作品の言語の現代化と、文芸作品に新文字の試用を提案した。この提案書には、陳望道や作家の巴金はじめ六八名の著名な文芸作品者が名を連ねている。

一九四九年一〇月一日、中華人民共和國成立。

建国後、彼は復旦大学新聞系の副教授に任じられ、全国の大学ではじめて「文学改革」の講座を開いた。

語文運動の新しい動きが主として北京と上海を中心にあられた。

まず北京では、中央政府組織法を採択した政治協商会議（同年九月）の直後、その「人民民主統一戦線」の精神にのっとり、語文問題について意見をことにしていた、国語運動派、ラテン化新文字派、簡体字派が団結して力をあわせ語文改革という困難な任務をはたすため、同年一〇月各派の代表者が集まり中国文字改革協会を結成した。海曙は新文字派を代表してこれに参加するとともに積極的にこの協会の活動を支えた。

この会では、国語ローマ字・ラテン化新文字その他の文字改革方案を検討して、条件が熟した場合、文字改革を行う準備として、当面の具体的な目標を決めた。第一は漢字

改革の研究。表音方案の研究を主な目標にして、これまでの漢字改革の各種方案を研究する。あわせて漢字の整理簡易化も目標の一つになった。第二は中国語の統一の問題。中国語の総合的研究を行うとともに、北方語による統一の基礎的諸問題を研究する。第三は少数民族の言語文字の研究。第四、以上の研究成果にもとづき、政府とともに可能な実験を行う。第五、文字改革の宣伝を行い、多数の知識人や人民に文字改革の必要性を訴え、研究成果を知らせる。一方、それより少し前、同年九月、倪海曙ら新文字工作者が集まって上海新文字工作者協会を設立している。その「成立宣言」で、彼らは「新文字運動はプロレタリアと革命的インテリゲンチヤアによって指導され、新民主主義文化の建設と各革命的階級の連合専制を目的とする語文運動である」と規定し、新文字工作者が団結して各地に新文字工作者協会を設け、新文字を大衆の中に拡大するように呼びかけた。

新政府は新文字を採用し、これを推し広めるであろうと

いう期待をもち、その成否はひとえに新文字工作者のこの数年の努力によって決せられるという楽観的な見通しを抱いたとしても、この運動の発生当初の事情やその後の経過からみて無理からぬところがあった。

上海新文字工作者協会は精力的に活動を始めた。成立後一四か月の間に、各地に協会を設立し、多数のテキストと理論書および小辞典を出版し、また機関誌として『新文字月刊』を創刊した。だが倪海曙がこの期間内の総括で指摘するように、協会成立直後の第一期には、延安地区など老解放区におけるこの運動の発展経過や教訓がまったく生かされず、従来の理論原則と国民党政権下における実践方式を、そのまま繰り返したくらいがあった。「影響の拡大を求めることに急ぐ、計画はすべて主観的願望にもとづき、実際と結合していなかった。多くの仕事をし、情熱は高かったが、効果はあまりなく、運動は民衆の中に根づかなかつた」。第二期に入つて、当初の誤りが検討されるとともに、老解放区ではこの運動にたいして非常に慎重な考慮がはら

われていたことや、新政府はこの問題に軽率に決定を下さないなど、上層指導部の慎重な意見が伝えられたこともあって「視野のせまい、近視眼的な主観主義は多少は克服された」が、拡大工作はしだいに低下あるいは停顿して、運動は低潮期にはいり、後しだいに中国文字改革協会のしめす実験と研究の線に後退し、最終的には一九五五年の秋、全国文字改革会議が開かれて、文字改革が新しい段階に入った時点で、新文字運動はその歴史的を終えて活動の「結束」(終了)を宣言した。

一九五五年一月、中国文字改革協会に代わつて文字改革(研究)委員会が國務院の直屬機関として設けられ、倪海曙はその委員という要職に任命された。そしてこの委員会に「拼音委員会」が設けられるや、彼はその委員を分担することになった。この拼音委員会の委員には、ほかに呉玉章・胡愈之・韋愨・丁西林・林漢達・羅常培・陸志韋・黎錦熙・王力・葉籟士が名をつらね合計一一名であった。の

ち周有光・胡喬木・呂叔湘・魏建功が増員されて、一五名になった。

拼音委員会はそれ以来三年余にわたって、歴史上のいくつもの中国語表音方案ならびに内外から寄せられた各種の方案や意見を参考とし、国内各方面の意見を徴して、六種類の案（漢字の筆面をもとにした四種類の方案のほか、ラテン字母による方案、スラブ字母による方案）を作成して、五五年一〇月に開かれた「全国文字改革會議」に提出した。その結果、ラテン字母による案が採択された。これが五八年二月、全国人民代表會議で批准され、公布された「漢語拼音方案」である。

このローマ字の方式の中には、b, d, g, と p, t, k で無気音と有気音を区別する点や、zh, ch, sh の綴りのように、ラテン化新文字の伝統にしたがったものが見受けられる。倪海曙らの意見を尊重したものであろう。

建国後の活動 その二

一九五六年五月、文字改革委員会に付設された文字改革出版社（以下「文改社」と略称する）が成立され、倪海曙はその責任者となった。のち一九六〇年に、中央機関の改革にともない、文改社は姿を消したが、三年数か月間に文字改革に関する図書六三〇種類が出版された。五八年度だけで印刷部数は三千万冊をこえたが、この三年間には文字改革に関する学術書や一般言語学文字学の著述のほかに、三七〇種類にのぼる各種の内容の漢字とピンイン対照の注音読物ならびに簡体字・共通語・漢語ピンインを教えるためのテキスト、図表・カード・習字手本などの出版物が刊行された。なかでも特筆すべきは、彼が多年にわたって収集した拼音文字の史料を、『拼音文字史料叢書』、二六種、二八冊の形にまとめてで刊行したことである。この中には、初めて漢字音をローマ字で表したマテオ・リッチ (Mmateo Ricci) の漢字ローマ字対照のペン書きの文章をはじめとして、清末の各種類の切音字を網羅し、内外の学者の注目するところとなった。

同年八月、月刊『拼音』（のち『文字改革』と改称）が創刊された。表音文字の研究実験誌で、海曙が主編となり、文字改革社から出版された。

葉籟士の年譜によると、一九五九年一二月、山西省教育厅が万栄県でひらいた「山西省・注音掃盲・現場会議」に参加し、万栄から帰京するや「万栄画報」ならびに注音掃盲用の課本と大量の注音読物を編印したとある。

山西省万栄県が試みたピンイン字母を利用して識字を効果的にすすめる「注音掃盲」の特徴を、倪海曙は「注音によって字を知らない児童や文盲が、少量識字の状況下で大量閲読ができるようにし、その中でより多くの字をおぼえることができる方法」であると見抜き、大量の注音読物を提供したのであった。

一九八一年七月、ハルピンでひらかれた「全国大会文字改革学会」の成立大会に出席、その会長に選ばれた（名誉会長王力、副会長丁義誠ら八名）。この期間中に、丁義誠ら

と懇談し、丁氏らが黒竜江省でピンイン字母を利用し、小学校文改革の実験を試みようとする考えを積極的に支持し、その実験の内容・進め方・方法について意見をのべるなど、きわめて積極的に協力することになった。黒竜江省の試みは「注音識字」・「提前読写」⁽¹²⁾（読み書きを早める）方法として全国的に小学校の語文教育と成人文盲の識字教育に影響を与えている。

葉籟士の「倪海曙年譜」にいわく。「黒竜江の実験の成功は、もとより実験の発起人・省の文字改革弁公室の責任者・丁義誠氏や、李楠同志および実験に参加した先生方の辛勤努力の結果であるが、海曙の有力な支持、具体的な指導なしには考えられない。彼はこの実験の基礎を固めた人であり、道案内者であった。彼は唱導者であるとともに実践家であった。実験がはじまるや、彼は教材・教授法の改革、教師の養成、経験の総括などに多くエネルギーを注いだ。八二年から八四年の間に、黒竜江を五回も訪れている……」。

倪海曙が晩年に書いた、共通語普及に関する文章三篇が残されている。

その一。一九八三年四月、上海市の文字改革協会と教育局が共催した講演会で、共通語を広める活動の重要性と緊迫性を論じたものである。この講演の手稿は『語文建設』一九八八年第六期に「遺稿」として掲載された。「全国的な精神上的の交通運輸網をつくりあげることの重要性と緊迫性」を論じたもので、「二十年内に共通語の普及を達成しよう」の副題がついている。

共通語の普及は社会主義現代化の先決条件であり、教育の普及、文化の高さを示す重要な指標である。その重要性は、道路網・鉄道網・航空網などの物資的交通運輸網をつくりあげると同等の重要性をもつと説いている。

その二。一九八四年三月、北京の共通語研修班で、「共通語を広めることについて」と題する重要報告を行った。まず第1篇において①共通語は現代のものであり、たとえ

ば『水滸伝』は元時代の白話である。②共通語には規範があり、語音・語彙・語法に標準がある。③共通語は言文一致であり、④共通語は全国に通用するものであり、一地方の方言土語ではない、と4点をあげてその性格を規定した。

次いで第2篇においては、この共通語を広めるのは、社会主義の政治・経済・文化・軍事の現代化の速度を早めるためであり、現代化とは効率化のことであるから、共通語を広めるのは新しい技術革命を迎えるためであるという。

第3篇においては、「いかにして共通語を広めるか」を論じ、彼は「五つの力を通じて」、「七つの面から」広めることを論じたが、のち「八つの面から」に改めた。

その三。一九八五年三月、彼は香港中国語文学会・香港中文大学など四つの団体が共催した「共通語の教学と検定の研究討論会」に招かれた。香港滞在中に香港中国語文学会を訪問し、座談会に出席した。香港で出版されている共通語の読物『普通話』に、五つの力を通じて、八つの面で共通語を広めよう」と題する文章を書いた。

「五つの力」とは、① 政策法令の力、② 大衆あるいは社会運動の力、③ 学校教育の力、④ 出版の力、⑤ 科学研究の力のことである。

また、共通語を広める八つの重点として、① 政治言語の面（行政・司法・外交などの言語）、② 学校教育の言語の面（幼稚園から大学まで）、③ 生産言語の面（生産上の指令、操作の用語など）、④ 軍事言語の面、⑤ サービス関係の言語の面（商業用語を含む）、⑥ 宣伝あるいは情報伝達の言語の面（ラジオ・テレビなど）、⑦ 文学芸術の言語の面（映画・演劇・詩歌・および方言を使用しなくともよい雑戯曲芸など）⑧ 会議用語の面をあげ、これら八つの面で共通語が通用語になり、規範化の程度が高くなれば、共通語は基本的に広まったと言える、としている。

葉籟士の年譜は、「この三篇の文章は、現在の共通語問題にたいする全面的で完璧な、精緻な論述で、いくつかの点で三十年来の古いワクを突破しており、新しい時期の共通語を広める活動にたいしきわめて重要な指導的意味をも

っている」としている。

注

(1) 葉籟士『倪海曙年譜』（『倪海曙語文論集』）上海教育出版社、一九九一年

(2) 上海新文字研究会 一九三四年八月、エスペランチスト葉籟士らは「中文ラテン化研究会」を設立、国内における普及活動を始めたのはじまりである。同三五年一二月、陶行知の呼びかけで「中国新文字研究会」が生まれた。この会の成り立ち趣意書に賛同の署名をした人は、蔡元培・魯迅・郭沫若・茅盾・陳望道・陶行知・葉聖陶などをはじめ、六八八名にのぼる。この会の上海分会として、「上海新文字研究会」が、三六月七月に成立した。

(3) 租界 中国の港湾都市において外国人がその居留地区の警察・行政を管理する組織及びその地域。一八四五年イギリスが上海において創設、一時は八か国、二八か所に及んだ。上海には共同租界（旧イギリス租界と旧アメリカ租界が合したもの）とフランス租界があった。共同租界内の、蘇州河以北の日本人が比較的たくさん住んでいた地区を、日本人の間では俗に「日本租界」と呼ぶこともあった。

(4) 陳鶴琴（1892-1992）浙江省上虞県の人。はじめ米国のホプキンス大学に学びのちコロンビア大学に転じ教育心理学の

ソーンダイク (L. Thorndike) 教授に師事した。ソーンダイクは英語の語彙選択の上で、日本でも有名だった。『聖書』、英文学の古典をはじめその他各種の資料四一種の文書に現れた約四五〇万を調査して1万語をえらび、その詳細を Teacher's Word Book (1921) として発表した。その後、この分野で注目すべき研究があいついで発表され、日本の英語教育にも少なからぬ影響をおよぼした。『英語学辞典』(研究社 昭和十五年十二月) の Vocabulary selection の項を参照されたい。陳鶴琴が『語体文応用字彙』をあらわしたのは、師ソーンダイクの影響と思われる。

一九一九年帰国し、南京高等師範学校教授に任ぜられた。そのころ前後して、中国で初めてといわれる2冊の大著、『児童心理』と『家庭教育』を世に問い、児童心理・幼児教育の専門家として令名が高かった。晏陽初が平民教育を始めるに当たり、テキスト作成のため上記の字彙調査の結果、『語体文応用字彙』(商務印書館、一九二八年刊)の一部を提供したことは有名である。

一九二七年に南京特別市教育局第二科科长に就任。市の教育整備に成果をあげた。一九二八年、上海工部局の華人教育処の処長に就任した。外国人に膝を屈するものと一般人の非難をあげたが、租界にすむ多数の中国人の教育改善のためつよい信念をもって衆議をしりぞけ、上海工部局教育委員会の

招きに応じた。

抗日戦争が始まってから、一九三八年以降ラテン化新文字運動は上海の難民収容所で大規模な実験教育を行ったが、これは鶴琴の援助と協力の賜物であろう。

(5) 三八年三月 この年の三月五日、国民党中央宣伝部は「ラテン化新文字に関して」という指令を発表した。それは「中国字ラテン化運動が国民の抗戦の力を分散させず、純粹に學術に立場から研究したり、あるいは社会運動の一種の工具とするかぎりこえを許してもよい」というものであった。

三七年ごろからの、国共同作へむけての両者の歩みよりの中で、国民党も新文字を解禁せざるをえなかったのである。

(6) 難民収容所 当時、上海における難民収容所の数は八〇箇所をこえていた。一九三六年四月現在、そのうち四〇箇所以上で、新文字による識字教育が行われた。合計一二〇クラスで、三四〇〇名の学員が受講した。その内訳は、児童六〇%、婦人二五%、男子一〇%、その他五%である。そのうち知識分子のクラスは四七あり、学員数は八〇〇名であった。その内訳は学生四〇%、小学教師一五%、職員二五%、収容所職員四%、その他一〇%であった(倪海曙『拉丁化新文字運動的始末知編年紀事』知識出版社、一九八七年)

(7) 新四軍の蘇北根拠地 根拠地の正式の名称は「抗日根拠地」。

本誌第七六号の「華北抗日根拠地の識字運動」(注)を参照されたい。

抗日戦争が始まり、中国共産党指導下の紅軍が、国民党との協議にもとづき正規軍に改編され国民革命軍第八路軍(略称、八路軍)と名を改めた頃、さらに主として江南八省の各地にあった紅軍遊撃隊は集合して国民革命軍新四軍(略称、新四軍)に改編された。蘇北とは、江蘇省の最北部、山東省に近い地区をいう。新四軍の中心的な根拠地であった。

(8) 根拠地の新文字 新四軍では初代の軍長・葉延將軍の考えでかねてから新文字の教育に熱心であった。三八年八月、同軍政治部の宣伝部では、全軍の將校・兵士の言語状況にあわせて、学習に便利なように「普通話新文字方案」を作っている。

(9) 日本軍及び偽軍警 以下、日本軍ならびにその傀儡政権の軍隊・警察を便宜上一括して、「敵」とする。

(10) 物資の輸送 この頃には、陸の孤島といわれていた上海と、広大な解放区との間の人の往来は嚴重な封鎖網をくぐり抜け、かなり頻繁に行われていた。私は一九六四年の夏、上海で上海総工会副主席の沈函さんから、いろいろ昔の苦勞話をうかがったことがある。この人は解放前に楊樹浦発電所のストライキを指導した労働者出身の革命家であるが、当時なんども新四軍支配下の根拠地と上海の間を往復したことがあ

る。往路は薬品など不自由している物資をたずさえて行き、その代わりに解放区の近況や戦況などをみやげ話に持ち帰り、人々に伝えたそうである。

(11) JOHN DeFRANCIS. 米国の中国語学者。主な著述は下記のとおりである。

Beginning Chinese, Yale University Press, 1946.

Nationalism and Language Reform in China. Princeton University Press, 1950.

The Chinese Language, FACT AND FANTASY. University of Hawaii Press, 1986.

(12) 注音識字、提前読写 この新しい教学法については、拙著『中国の識字運動』(東方書店、一九九七年九月刊)を参照していただきたい。